

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



小針 誠治さん
昭和14年2月9日生まれ。
鎮鍊地区在住

私の生い立ちと

小学校の思い出

私

の住んでいる「鎮鍊」は、音更町の西南の地域ですが、ここを流れる「チンネルオマツプ川」(アイヌ語で鹿の皮を干すという意味)が語源になっています。

河畔からは、昔狩猟が行われたと思われるヤジリや土器片が数多く発見されています。私は昭和14年、この地で生まれました。祖父の富太郎は、明治37年に静岡県から入植。大正9年現在地へ移住しました。我が家の宅地は果樹栽培に適していたため、戦前から関心を持っていた梅の木を栽培していました。

私は昭和20年4月、国民学校に入学しました。大きな教

室に全校児童40人以上が集まり、校長先生1人で教えていました。先生の補助として上級生の女子に面倒をみてもらったことや柏の切り株でカブトムシを捕まえたことなどが楽しく思い出されます。当時は戦争末期で小学校の横に防空壕がありました。幸いにも一度も入った記憶はありません。

高校進学と就農

母への感謝

昭

和29年、万年中学校を卒業後、江別の野幌農高校へ進学。全国から集

まった仲間との共同生活で交流も深まり、貴重な経験をしました。当時の学生運動の影響を受け、学校運営に不満を持った生徒会が登校を拒否する大胆な計画を立てたことは今でも記憶に残っています。卒業後、就農しましたが、

すぐ父が病に伏し、農業に慣れない私と母の2人で14町歩の畑を耕作しました。その頃、家族11人の生活を支えていたので小針家最大の危機でした。しかし、母は不満を一切言

わずに黙々と働いていたので、自分もそれにつられてやってきただけで苦勞という意識は全くありません。母は現在100歳、元気に暮らしています。母への思いと感謝の気持ちは人一倍あります。

当時、私は連合青年団活動にも参加し、600人ほどの団員がスポーツや演劇、研修会など楽しく活動をしていました。ここで妻と出会い、昭和39年に結婚。4人の娘たちにも恵まれました。

鎮鍊に新しい風が

吹き込む

平

成2年、建築や公園設計設計集団と高野ランドスケープが鎮鍊小学校跡地に事務所を構えました。この出来事は私たちにとって大きな変化をもたらしてくれました。

平成6年、「豊年万作祭り」を開催し、鎮鍊始まって以来の大にぎわいとなりました。祭り前には、象設計集団が神社をきれいに整備し、彼らの人脈で東京や道内各地からこの地に1000人以上の人が



▲4歳の頃、祖父富太郎と一緒に満開の梅の木の前で

未来へむけて

地域らしさを

昨

年は北海道と慶尚南道(韓国)友好提携10周年記念事業で、趣味であるミ

ニバレー協会の一員として、韓国を訪問交流しました。鎮鍊100周年を迎えた平成18年から10年間で人口は3割以上減り、現在は約65人です。人が減っても、農業自体はすごいスピードで機械化が進み、無人化も可能な時代です。心配していません。ただ、地域らしさが損なわれるという危惧はあるかと。コミュニティを維持するために、一人ひとりの意識向上と地域ぐるみの努力が必要になっていくと感じています。